青山御流
活花手引種前篇 二

二之巻凡例

○此册ハ三の巻ニハ初心の輩挿花して其体と其像をもて図し
それなくしてはゝる形を得ず若く墨をもなり左右合せして
学得ば長短浅深高下残葉をなし

○花實草木春秋の次第をもて順を定め次さるも大凡乃ま
みして時候の遅速にかゝはらず次

○倭漢異名方言の類つらひくはしきハ混して却て
繁雑なる事故に耳遠くきゝ慣ざる異名ハ去るさ次第く
遠く稀なるもの同名異物の類を倭名漢名の次第を
摂して次十が二三を去る次

此通り々多の前へ搦に入るべし

かくのごとくを活さんハ瓶をかまへて意し
花器細きハうけ申さし梢と撓とを捺めて
瓶の口木附通り入かまへしまへ根曲けて水際
ちよりかくいよく手をめて深へし ふとくして捺かる所ハ据め線
いまだ手あべし 仕様委くハ初巻に記せ所 何までも此意を推て入るべし
なおと 左にあらはす

此撓をよく捺めて挿べく入るべし

此ところゟ捺乃だし梢とのせべし

梅

図のごとく姿を取し 指を瓶の
中へ糸を下の枝に添ひて挿へし
まつく水際の曲りなくのごとく伸し 約まやかにひきしめ入て
梅は物好なる風情の草木は大抵此趣を以挿べし 形の変化ハ四時にまかする
季あし

如図瓶口より枝左香く出或ハ月のうち面さし入るゝことハ悪し
趣して掛瓶の水際ハ志ほらしく
出株ニ挿へしト椿も的中ニ入る
ことを直し後のなをしとさるへし

如是上より下枝まて打なしふと
伸ひ出たる枝ハ悪し去りに水際
まて十文字にみえてよからぬ座
花の員を考へ見へし

白梅
山茶花(ツバキ)
海石榴トモ
以下通用ニ随テ椿字ヲ用

図のごとく何程風情おもしろき茎器をも切りてハ悪し
ことに樹も表にありて添し添なれどあまりに添ふるハ
よろしからず添のなきとしを考へし

梅
福壽艸
元日艸トモ
報春艸トモ

青柳
つばき

かく柳の枝もおゝし
つばきもつまやかに入べし

かく梢のさし出たる枝を除きつぼみのところ斗を志んとして
横出し花をきりて束を揃めさしはさ
そく為し　但出たるハ手ろ出さるも妙なり

辛夷（コブシ）　又こぶしなる
木筆トモ
望春トモ

如此ハそへ枝を添おりて

かくまかほそたためまんまるく〳〵生べし餘り小枝ハ除けく
つきまちるハ悪し生かたのさゝうさ
もはらこれに準べし別体多き見し

桃（モヽ）

仙果花（センクハ）トモ

かくなめひきいれる
かゝれは柳より次枝をゆと
あまりてかろくとこほしくきゝし
ことにかさねつゐなしとの上枝は大ひなる
時は器のこけんとをおほつかなし
此の意しとるへし

蘭を紫組紐れて意し

垂絲櫻(シダレザクラ)
垂絲海棠トモ
春蘭
獨頭蘭トモ
かく枝をまかして
風情おもしろくもひつまように見ゆるほと
余情ふかし
蘭も上下のまをつけてさへし
なかと茶の湯のこゝろへあり

かくのことく花ハ本の枝伸ていきさき
まさ水際よりまさらせて差し
挿して山ぶき卯の花
金糸梅金糸桃の類ハ
とられたるのこゝろを以て
入るべし

小毬（コデマリ）粉團花ナリ

方まであけとも
こゝめる移しても

如斯巾ま出たる長き枝を
ちゞめて水際よりひきく
挿し中より婉妻萩
たくまかりおもしろは
なかるべし

かくのごときハ梢つよくして山ぶきのなよらく情薄し
かやうにハ格別なるよき枝ハ
なびく風情もあるよしなるべし
外体赤松なるを花
いつれも松形し

やまぶきハおしなべてたかく高下なくいけ也長短にあるべし
なかにも葉葉に茎のおくれる様子並置しきおに手あり
月乃香い萩なとゝ　阿なるへきも此れ保まへ同意なるべし
可法ハ萬事の書にあり

山ぶき
棣棠（ドビ）なり
酴醾花トモ

くゝむやうていづれも合て出るときハあしらひなども表裏ある
大葉などハ陰陽のかたちをあらはし葉を揃しためくさゝく組べく
事しよく作るかくせる者ある葉など出れハ悪しきこの圖を考べし

図のごとく一方を伸へ一方を屈めて入替しまた陰陽を
わくのごとく組合しこれをわりて二株組といふなり左右曲直
其様俯仰時宜ニ随ふて平かにしなとを考て図をよく〳〵見るへし

大葉蘭

ヒトツ葉蘭トモ

如是ハ風情ハおもしろげなれども表裏のくさ猶
悪しくまく一体もあることも見てよく浮し抑へ候
はまとどもへし

花

図のごとく陰陽を組葉を約まやかにとりしめて出すがよし
すく根の細きものは何によく浅く際の強て高きは悪し
花体杉くみなり

如此の花形ハひとゑ
るにて余情薄し左のごとく
水際ハ一寸引きゆるく出て
すこしゆがみ表裏まぎらしく組て
左をとるへし

かく一寸八志ん子添へ引志めて生へし香おかまんで葉つけなど
あしらふものハ皆去葉をとらすつく入へし

海棠（カイダウ）
海紅トモ
志ゆかう菓こくるし

かく志ゆかも
活偏と実添手うけて入へし

おく枝茎あまりに花おほくて
なるハ悪しく葉さきしげく
おほく鏡のふちに
さはるやうなるハゆるまざる
やうにしおほく浪こえねば
なびかずと長くおし
いだしみぐるしく
入るるハよろし
重の圓を
見へし

薔薇 イハラ
長春トモ
尤影多し

おく植菊なとはなびきゝたるはあしくいづれ
一方を除ひて上下とて飾るべしあしらいはなびきたるよき
とり合せゆへきほくこゝろへし

紅楊櫨（ヘニウツキ）
錦帯花トモ
海仙花トモ
十姉妹トモ
もこねうつぎとも

かく上下左右をふり合せて入へし
下は此臺萩をかく上と見合て
生てよし

櫻艸も二株ニ
組合なし

如此水際より乱れさかるハ悪し
ほとちよき中の枝と深て水際の枝と
深くて入るへし　次を見へし

金雀花なり
躑躅花
種類多し
櫻艸

かくちうんなるものと茎多く葉薄く生ハ弱し葉を厚く
茎多く好ミ挿べし花の際などハひろく葉厚く多くし
当流よりなくとも挿べし

芍薬(しやくやく)

花相トモ

牡丹トモ

当風情のあしらへるハ菊ニ同く准へし

後の巻と知るへし

すくのごときは楕へ瓶上を深くゑし　次の枝を
ぢんとして楕をきりさく水際より高かしかく水際の葉
なかくさをみれは椿の長くなみを深くし萩なりと葉うつりて
まうかんあしゝ

映山紅（きりしま）

仙臺萩

清くらなとハめ色一色をまとめし無ていにつり猶
類ハこのゝそろざるものなり ゆへに無り杉好き
を求て入べし

如是左右へとり亂さ
せるハ悪し　次の圖を
見るへし

藤 フチカツラ
如斯とりためて一寸

かく五つんとまきつたあくるゝ子足ゆるも悪し
去る輪だちりハ深き深く折く深きに見えざるへし
深めのなをしくしは
かへし

美人艸（ヒじんさう）

麗春花トモ

錦被花トモ

ぬき葉うけ枝かげよりこゆるを
よしまくゐきこゆの花なと
又た花高下を様子よし

如此ハ水際の葉混乱しよく流るゝ葉も不形にて
悪し茎もつぼミつくるにて繕し次の図を
考ふべし

すかしゆり
百合ナリ
山丹トモ

おく地隈の
葉あひそれいろさしと通して葉を動ひ
よき葉はかりとるへし

如是ハ葉四方一ひらきて茎も
乃り形しくて悪し此のなきとしとみるへし

いちはつ
紫羅傘ナリ
紫蝴蝶トモ
鳶尾草トモ

かくさはかにいくる

図のごとくたくみなる長き葉とつの花の
ちりし葉ニ准て花とものを見し

おく葉裏混さしまはり為し高さて長短
あしらひもらへくおさね花ごしてまへし
作次とゆくし

著莪（シヤカ）

胡蝶花ナリ

鳶尾花トモ

よく表裏をきびし水陰を
つゞめて生べし葉体かさなりそふを
准てよし

ぜに葵などおく丈高く入きるハ悪し枝茎くねりて
添ひかさく風情締し有る形ひきく入るべし
手ある籠などハおして小体に入れバよくうつる
其外形り次の書しをみるべし

錦葵（セニアヲイ）
こあとひとを

あく枝々と表裏ふりかへ梢をのぞき
葉だまりとくみあひ水際ひきく入へし

如是二本指ハしんを争ひて悪し　指さすニ一本ハ余情に落し
伸さる所ハ心を当て添へし　ゆりかこミてそのきハしてよ株かこミ
しんすなハちて株をへ屈し
次を見るへし

さらにく水際の様をうつし枝をきりて深くさし槙なとは葉も
まく見せ形りゆるき事ゆゑか梢になしてよせきこてさらになり
此前この事をとひ対置ゆへてもよし
常しなるへし

槙（テキ） 椴ナリ
くさまきとも
高野まき、
らかんまき
種々あり

おく陰陽ちんきいの心得
つけ次第出ある花かのごとく
肝要してとりなすべし
まもるいまへし
かしこぞ

此の図をみるへし

かくのごとく葉の俯仰をまじへしつぼめやうに生べし
但茎の形まことに葉形陰陽子隠てさるへきあり

萱艸（クワンサウ）
忘憂艸（ワスレグサ）トモ
但茎の八重ニ成るハ毒あり

ふとゐはきしぎは流がれよりてなくまぎれどもまるらかごとく荒ぶるを恐し 虫子を流くよせ添袖あれうつすひとくと如きてし 余情あり

ひらゐのお
莞
燈心草トモ
江蒲艸トモ
ふとゐ とも
つくも

澤瀉
慈姑ナリ
剪刀艸トモ
燕尾艸

この花様まるにて挿し又は茎などあまりあるハまた人ゆるも事
余情薄し哀れなるして千代花葉と茶子加へし
またハ深山の花葉をさへ斜めにさし其の花を立てて挿し
左の図とらべし

きんらい艸

熊野菊

外此趣を推して見すへく候へし

此瓶ハ古て志絵有るのミにて錦ノ風体を以てなくなり
何事も古きしつらひ挿花水際の美をなすとも
者の角へ見へし此の図を見へし

如是のりとなびきうをつけて差べし
或ハさゝげ高く枝葉しげく莟多き附る
さし留ふかくし　随分たをしてかゝる事もなし

蜀葵（アフイ）
戎葵トモ
一丈紅トモ
單重紅白數多有

きぼうしゆ葉三枚ヵでハ葉一本まじえよし　但三枚ニ一本
までハ四本となれバも苦しからず候
凡きぼうしゆハ一擬ニ葉
四枚までも葉ハ一本ニ限るハ
なりきざ茎さぶひの事なり
前ニ陰陽の論を以擬の
様と字なり深の圓見るべし

如是の杜若ハ一葉組机迄
て為し茎の葉もあしらひニ
用ひまとひていろべし
然ハ初巻ニくるし

二種とも茶葉の抑もむすべく
如是当流の圖にて
知べし

きほふしゆ

杜若（カキツハタ）
燕子花ナリ
劇草トモ　馬藺トモ

此活ハ葉組容とも二宜しからず
次の図を見へし

擬法珠
玉簪ナリ
白鶴仙トモ
紫萼トモ
蕙ノ花

如是葉組入て悪し　下ゟ大葉の数水際ゟ
後ゟ付ハ下草添へあるべし　後の図考べし

柏 カしハ
大葉櫟トモ
抱トモ
ひめゆり
山丹トモ

花菖蒲も杜若のごとく葉をまぜして組へし若く一枝つく
伸くれしてねぢるは悪し　たゞ杜若より葉細くよわきゆゑ
高く立葉は杜若の強きを撰みて遣へし　此図をみて知へし

花菖蒲（ハナシヤウブ）
泥菖ナリ
沼あやめとも

かく葉と絹よくやうよくいふべし
別作ハ杜若ニ准ずべし

がく花ぶりよくして茎ほそく葉の躰見ゆる
本のを押し伸してきハひかし切りて忌し
左の事しるへし

アヂサイ
紫陽草
線繍花トモ
俗ニ七變化トモ

おく中に下をとりちゞめてばかり伸しすゑよし
おく紫だちのえだを添て紫の薄き所を補ふよし

さゝゆり　百合

おにゆり　鬼

この作上二輪ハよりかれども観と
のきるゝて悪し
左の圖と見べし

図のごとくゆりを瓶に挿るゝ事ハ出生を見立
或ハ花を留て形りよく生べし　ゆりの種数多し
何れもその品を定め置し

馬盥轡留

馬盥轡留に種々の傳説あれとも當流にハもちひず旅ハ昔を
新製に造りし器物なりとも名の授拙それハ貴人方招請なと
祝の事ハ勿論常楽會の席とハいへとも其上の具にも不慮の事あらむ
ゆへに止むことなくとりもちゆることありとても於て壽のハみなさ
に訳なし先々茶の湯にそよきなりにまくらむへし其おハ小刀とめ
くさり留砂利と名ク解留皆即其の一興なり仕様三巻目の末
にたくさん鏡と名ハ仕方ニあり出次圖とあハせて考へ知へし